

家であつたらしく、丸太の壁は隙間だらけでガタガタの扉から吹き込む風は肌を刺すようである。電気もランプもなく、真つ暗い部屋に薪を燃やすペーチカの光がチラチラと揺れ、言いしれぬわびしい夜であつた。

毛布も藁布団もないので、板の上に着のみ着のまま背囊枕に横になると、小雪まじりの隙間風が顔に吹き付ける。タオルを首に巻き防寒帽で頭を包んで寝ると、疲れが一度に出ていつの間にか眠ってしまった。

この日からシベリア抑留生活が始まった。地球の中何処にいるかもわからない。ただ寒さと重労働の毎日が続くことになり、時間は日の出と日没のみを刻み、月日は止まったままでわからない。年単位で時が経ち文字通り氷の中に閉じ込められた。この收容所（ハバロフスク州ホルモリー地区第二一七收容所）は、第二次大戦前第二シベリア鉄道（バム鉄道）建設のため造られた囚人收容所の跡である。

私の抑留生活

北海道 道下 徹 男

テルマ二〇一收容所では農園作業と伐採作業、二か月ほど過ぎたある日、收容所から一人の逃亡者が出た。要注意隊としてすぐに隊は他の土地に移動させられた。宿舎もない、我々は木を伐採し丸太で宿舎を建てた。農園作業は野菜の収穫、伐採作業は直径一メートル位の松の大木を切り倒し、宿舎までの運搬である。我が第三小隊の作業成績は、他の工兵以外の小隊と比べものにならないほど抜群で、ソ連の收容所長から見込まれ、食事も全員最高の百二十五％のノルマのパンを与えられた。これが悪かったのです。その後、鉄道路盤の建設作業、屋外の電柱建て等、困難な仕事は全て我が第三小隊に命令された。ある時は、路盤建設作業から帰ったばかりの我が隊に、收容所長が宿舎に駆け付けてきて「收容所の前に汽車が入って他の隊が貨車か

ら線路をおろしているが、さっぱりはかどらない、一時間以内におろさなければ私が罰金をとられる、お前の隊が代わっておろしてくれ」と、我が隊は休む暇なし、荷下ろし作業もさせられた。毎日の重労働で入院患者が出始めた。最高百二十五%の食事といっても普通より僅かに大きい黒パンで、腹は満たされず、ヘビヤネズミ、カエル、キノコ、草類またソ連人の捨てた塩ニシンの骨拾いに危険を侵して出かけた。

ンベリアに入ったら小隊長といえどもいばってなんかおられない、現場では率先して仕事に従事、帰ってからは夜の八時からソ連の収容所長室に行つて翌日の作業の打ち合わせ、隊員個人の本日のノルマを八十%、百二十五%の三段階に分けてつけて提出しなければならぬ。

冬がやってきた。夕方五時に出発、翌朝四時まで、連日零下二十五〜三十度の中で鉄道建設の夜間作業が約四か月間続くのだ。作業は独ソ戦争で持ち運び去られた鉄道道路の施設と路盤工事である。現場は暗く、薪を拾ってきて雪の上であちこちで燃やして作業する。

私は毎夜いつ時、ソ連の機関車の煙突の前に乗って、鉄道路線の完成した部分の場所まで機関車のみを誘導し、建設状況を確認する。この夜間作業が二か月余り続いたある日、私は機関車がカーブを過ぎた時機関車からほうり出され、頭から落ち、燃えている薪に付いていた釘に頭をぶつけて頭をさいた。体がものすごく熱くなってきたのに気付きやっと目がさめた時は、軍服の前半分は既に燃えていた。私も疲労の限界にきていた。体のやけどは尻だけであったが、頭のけががひどく、遂に入院。とうとう馴れた第三小隊ともお別れだ。馴れた隊員との別れはこれで二度目である。

一か月ほどで退院。退院者五十名の長として道下隊が編成され、二二三収容所に配属され、又も鉄道建設作業に従事する。作業は、貨車に積まれた碎石の到着を待って、碎石を貨車からおろして路盤を建設するのである。貨車の側板を開いて碎石をおろすのであるが、開け方を一つ間違えば石の下敷きになってしまうのである。ある日十台位の貨車のうち八台までは順調にいったが、九台目で失敗した。側板はハンマーで四

五回叩くと開くのが、最初の一回で開いてしまい、逃げ遅れて石の下敷きになり、又もや入院。二週間ほどで退院、原隊に復帰する。

昭和二十二年二月二〇八收容所に道下隊は転属され、ここでも鉄道建設作業に従事、隊長としての一日の睡眠時間は約四時間位、疲労が重なり身体はやせる一方で骨と皮。入営当時の七十二キロは見る影もない（おそらく四十五キロ位と思われる）。

ある日、鉄道建設作業現場にソ連の軍医が来て、全員裸にさせ、ふんどし一枚で一列横隊に並ばされた。軍医が一人一人の前で、胸をさすったり尻の皮をつまんで五十人のうち四名を選び出した。私もその四名のうちの一入である。（お前は使いものにならない）

ソ連は昭和二十二年八月この四名を二一八收容所に移動し、帰国要員を集結させ、約一か月薪集め、宿舎の清掃等の軽作業に従事させ、若干体力を回復させて、昭和二十二年九月十二日ナホトカから舞鶴に上陸復員させたのである。

私の青春時代の六九年

島根県 玉木文明

一、入隊までの二年

兄は一歳の時に他界していたので、私は次男ではあったが、代々農家である我が家の跡継ぎとして、旧制松江農林学校に通学した。時代は大東亜戦争の総動員令下のため三か月の繰り上げ卒業式で、それは昭和十七年十二月二十三日であった。軍事教練、山地開墾、勤労奉仕や農場実習の科目が多く、教科書の多くは開かない頁が多く残ったままの記憶がある。

昭和十二年、当時六年生だった時代から日中戦争以降の相次ぐ徴兵徴用や勤労動員のために、銃後と云われた農村も年々手間不足に加え肥料等の農業資材の不足が深刻になっていた。そこへ食糧増産の至上命令によるお米の強制割当て供出が次第に厳しく大変な時代を迎えていた。